

2022年6月19日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「平和をつくり出す人々」—6・23「沖縄慰霊の日」を覚えて—

聖書：マタイによる福音書5：9

今年も「沖縄慰霊の日」をむかえる。77年目になるが長い年月が経過しても戦争の悲しみはぬぐえない。毎年、糸満にある平和の礎に刻まれた名前をさすりながら涙するお年寄りの姿を見かる。

昨日、第16回「恨(ハン)之碑」追悼会が、読谷村瀬名波で行われた。日本軍が朝鮮半島から強制連行してきた若い男女が、軍夫や慰安婦とされ、その数5千とも1万人とも言われている。多くの朝鮮の方々が沖縄戦で亡くなっているが、名前が分かって礎に刻まれているのは464人に留まっている。

マタイ福音書5章9節「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」とあるが、「平和を実現する者」とは、ギリシア語の本文では、「エイレーノ・ポイオス」という単語で表されている。これはギリシア語の平和を意味する「エイレーネー」と、同じくギリシア語の「ポイエオー」造る・建てる、という意味の言葉からなる。「エイレーノ・ポイオス」それは一つの単語で、「平和実現者」「平和建設者」と翻訳される。当時、この「平和建設者」は、イエスがはじめて使った言葉ではなく、圧倒的な軍事力と政治力で、力によって押さえつけて平和を築こうとした当時のローマ皇帝に向けた言葉。皇帝アウグストスを賞賛する称号として用いられた。

イエスはあえてその言葉を使うのだが、しかも「その人は神の子と呼ばれる」とも言う。この「神の子」という言葉もまた皇帝アウグストスが民衆に強制的に崇拝の対象として、「神の子」と呼ばせていた言葉である。イエスは何故その言葉を用いたのか？

もちろん、イエスはローマ皇帝を平和建設者、神の子とは考えていたはずはない。それは、この世に対する風刺、批判であり、そのような武力、暴力、権力による平和など、まことの平和ではないということの批判であったであろう。この言葉が語られた前後関係の中で理解するならば、「平和を実現する人々」という言葉は、「心の貧しい人」や「悲しむ人」「義に飢え渴く人」「義のために迫害される人」という者たちの中に置かれている。つまり、イエスの言う「平和建設者」とは、貧しく、飢え渴き、悲しみ、迫害されている人々の側にあるということ。

「恨之碑」の「恨」という字は、恨みと読むが単に恨みだけを意味せず、悲しみ、不満、怒り、後悔などが長い間、しこりとなった感情を意味する。さらに、そういった感情を乗り越えようという意味も含まれていて、その痛みを共に担う友が与えられて行くのも、この「恨」には込められている。痛みを共に担う友が与えられて行く、ここに新しい平和の可能性があると云ってもいい。

主イエスは、貧しく、義に飢え渴く、あなた方、まことの義を求めるゆえに迫害されるあなた方、あなた方こそ平和建設者であり、あなた方こそ神の子なのだ、とイエスはそう言っておられる。痛みを共に担う中に平和はつくられて行く。(神谷)